



藤井 聡

東京工業大学大学院理工学研究科教授

地球温暖化に対する国民意識は、かつてない程高まりを見せている。至るところで、「エコ」のフレーズが使われ、政府もさまざまな取り組みを進めている。しかしその一方で、地球温暖化にかかわる事実が「誤解」され、具

体が温暖化対策そのものがしばしば不合理性となっているという点も指摘されている。

「エコ」のフレーズが使われ、政府もさまざまな取り組みを進めている。しかしその一方で、地球温暖化にかかわる事実が「誤解」され、具

体が温暖化対策そのものがしばしば不合理性となっているという点も指摘されている。

「エコ」のフレーズが使われ、政府もさまざまな取り組みを進めている。しかしその一方で、地球温暖化にかかわる事実が「誤解」され、具

体が温暖化対策そのものがしばしば不合理性となっているという点も指摘されている。

「エコ」のフレーズが使われ、政府もさまざまな取り組みを進めている。しかしその一方で、地球温暖化にかかわる事実が「誤解」され、具

体が温暖化対策そのものがしばしば不合理性となっているという点も指摘されている。

温暖化対策、きちんとした理解を

筆者の研究室では、「環境に優しい」と言われている行動」をもし1年間続けたらどの程度のCO₂が削減できるのかを客観的に計算してみた。その結果、例えば照明を1時間減らせば1年間で2^キのCO₂排出量が減り、テレビを1時間ずつ減らせば13^キ、エアコンを1度調節すれば32^キの削減になるということが分かった。ただし、クルマを10分減らしてみれば、たったそれだけで平均588^キものCO₂削減につながるという

結果は皮肉にも、両者の間に統計的な関係は一切ないというものであった。つまり、人々は、何が環境に優しい行動なのかを、全く把握していないのである。このような状況では、人々が温暖化対策のためにいくら努力しても、その努力は無駄なものとなってしまう。

「エコ」のフレーズが使われ、政府もさまざまな取り組みを進めている。しかしその一方で、地球温暖化にかかわる事実が「誤解」され、具

体が温暖化対策そのものがしばしば不合理性となっているという点も指摘されている。

最も温暖化対策として効果的な方法は、「クルマ利用を少しでも減らすこと」である。たった10分間クルマ利用を減らすだけで、「クールビズ」の努力の約20倍、照明をこまめに消して回ることの約300倍ものCO₂削減効果があるのである(なお、面白いことに、「エコドライブ」の代表的な取り組みであるアイドリングストップの効果は限定的で、クルマ利用を減らすことの10分の1程度の効果しかないという結果も示されている)。

とはいえ、都心部ならばいざ知らず、クルマでの移動手段しかない地域では、いきなりクルマを手放すことは難しい。そこである以上、現実的に我々が考えるべきことは、「クルマを悪と決めつける社会」ではなく「クルマと“かしくく”つきあう社会」のあり方を模索することにはかならない。そして例えば、都市部のみならず地方部の人も含めて、一人一人にクルマの使い方を見直してもらい、例えば「1日10分ずつ」とか「10回のクルマ利用のうち1回や2回」といったクルマ利用の削減を実際に考えてもらうことが必要なのである。

今、政府は一人一人の国民がクルマの使い方を見直すことを促すさまざまな施策を「モビリティ・マネジメント」と呼びつつ、その施策を大きく展開しようとしている。例えば、最近政府が公表した「エコ通勤」の取り組みは、クルマ通勤者の10人のうち1人が他の手段に転換することを促し、年間で100万トンのCO₂削減を数値目標として掲げている。

もしも国民の中に地球温暖化に貢献をしたいという気持ちがあるとすれば、まずは、本当に効果的な取り組みは何なのかをきちんと理解することが不可欠であろう。そしてその上で、戦略的、合理的に温暖化対策を考えていくという態度が何よりも求められているのである。